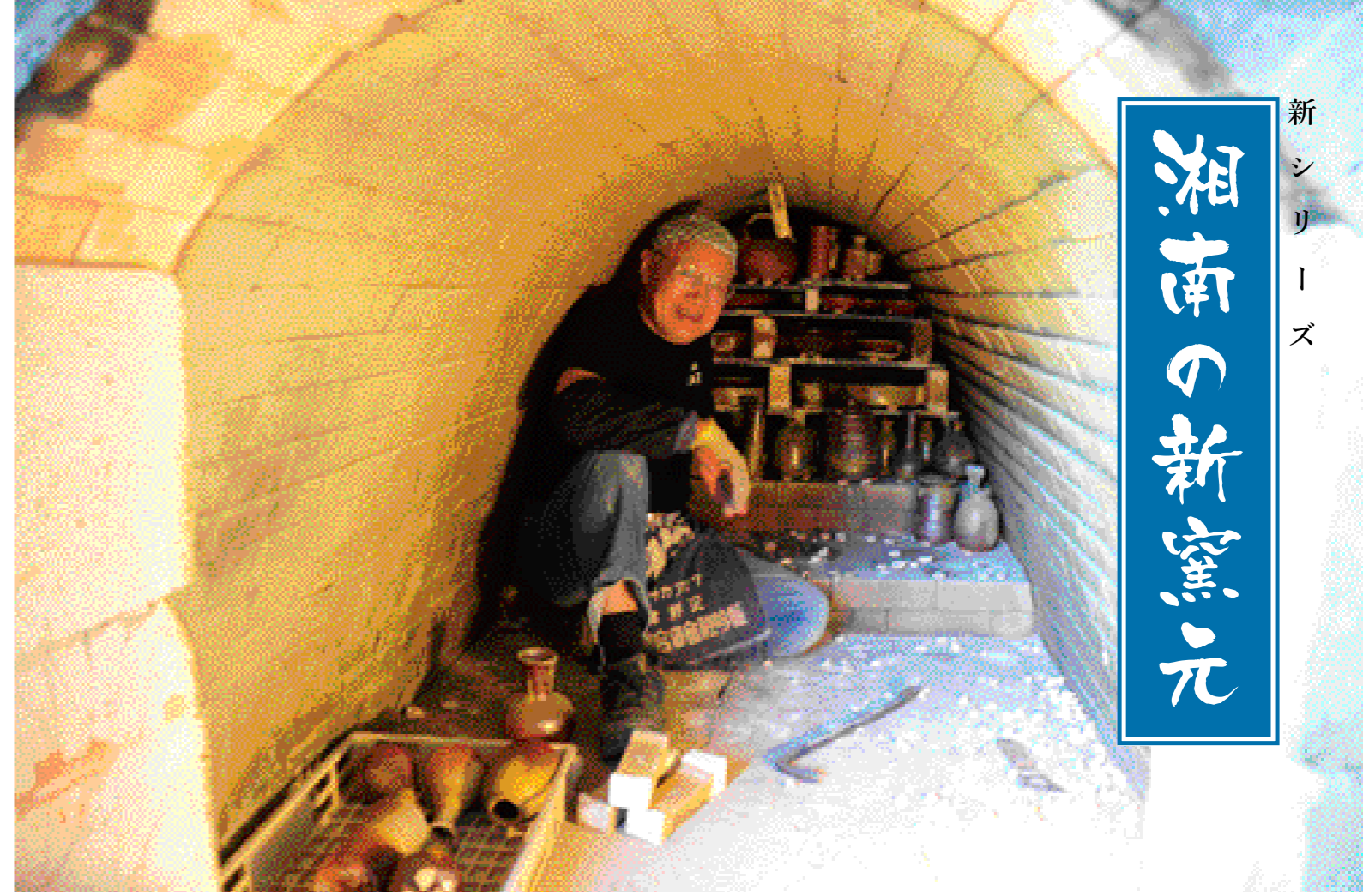


湘南の新窯元



各段の焼き上がりに笑みがこぼれる洋炎窯・斎藤洋輔さん

箱根湯本・洋炎窯 斎藤洋輔さん 宥窯による焼締陶を深める

三重県の友人の工房で初めて粘土に触れた斎藤洋輔さん。その刺激と感動がきっかけとなり、土と炎のとりこになった。箱根湯本に大小2基の宥窯を築き、陶芸仲間や教室の生徒とともに、年に2回ほど焚く。そして、築窯10周年を迎えた記念焼成が、この5月に行われた。



7年前に一人で築いた2基目の長さ4mの宥窯

PROFILE

- 1944年 群馬・館林に生まれる
- 1996年 作陶を始める
- 2001年 栃木県壬生町に開窯
- 2003年 松岡哲氏に師事
- 2006年 神奈川県箱根町に宥窯を築く
- 2009年 同地に2基目の宥窯を築く
- 2016年 同地旧東海道沿いにギャラリーを開く



平塚市の上野ひろ子さん

伊勢原市の和隆窯・秋原隆雄さん。10年前の築窯にも協力している



厚木市の大泉雅江さん



厚木市の長澤幸子さん

洋炎窯の10周年記念焼成に参加した方々



窯が安定してきたと語る斎藤さん

伊勢原市の市川京子さん



小山町の白井こと江さん



松田町の田中照代さん



相模原市の高橋静子さん



海老名市の横山金子さん



伊勢原市の黒田順子さん



斎藤さんの火前(上左)と中程の棚、奥の棚に詰めた作品(下)。「焼き上がりの予測ができるようになったので、作品によって詰める場所を決めるようにしています」



窯出しのあと、学生による管楽器の演奏を楽しみながら記念焼成を祝った



記念焼成に合わせ、窯下の旧東海道沿いに焼締陶を展示販売するギャラリーも開設した



mの窯を一人で築いた。焼締の窯に対する情熱は尋常ではない。窯焚きは春と秋の2回で、大小の窯を年に1回ずつのペースで焚く。今回の記念焼成に当てられたのは大きい方の窯で、それに必要な薪は約400束。薪は近くの業者から仕入れているが、45cmほどの長さに切りそろえたり、ある程度の太さに割ったりする作業はすべて斎藤さんたちの仕事になって

いる。 **攻め焚きまで夜は焚かない** 窯築築窯10周年の記念イベントは5月中旬から下旬に行われた。掲載した10人の方々が作品を持ち寄り、ローテーションを組んで全員で窯焚きを行ったが、洋炎窯の窯焚きはいつも年配者に配慮したものとなっている。「大きな窯の焼成時間は約6日

間ですが、徹夜で行う5日から6日目にかけての攻め焚きまでは、朝の5時から夜の8時までしか窯焚きを行いません。一晚で300℃程度下がりますが、3時間ほどで元に戻ります。長いこと、この方法で焚いています。焼き味や焼き締まりに問題が生じたことはありません。」

自分で整地し、仲間と窯を築く 60歳の定年を間近にひかえた斎藤さんではあったが、中東などでの現場経験を生かして自力で窯場を整地し、さらに仲間を加えた3人で長さ6mほどの窯を、土・日を使って築き上げた。ベースにしたのは御嶽窯の窯。松岡氏はそのころ、窯場の近くが宅地化されたために窯が焚けなくなっており、斎藤さんは御嶽窯を参考にしただけでなく、炉材もある程度譲り受けて、自らの窯を完成させた。6mの窯は炉床が3段になっており、焚き口との高低差は約50cm。その後斎藤さんは7年前に、長さ4

3年間通い、2001年57歳のときに栃木県壬生町の民家を買って灯油窯を設置し、本格的に陶芸に取り組む体制を整えた。 03年斎藤さんに転機が訪れた。神奈川県伊勢原市で、作陶のかたわら陶芸教室を開いていた松岡哲氏と知り合い、その教室に入ることができたからだ。松岡氏は伊勢原市の南にあたる岡崎御嶽に窯を築き、焼締やオリジナルの木灰釉もので知られていた。しかし、氏が主宰する三余庵陶房陶芸教室には、独自の入門条件があった。それ

は、自分の窯を持ち、自ら釉薬を作り、自ら焼成することです。斎藤さんは壬生町に窯を持っていたが、目標だった焼締を行うために新たな窯場探しを本格化させた。見つけたのが、箱根湯本駅から3kmほどの旧東海道と箱根新道に挟まれた傾斜地。斎藤さんは、薪窯を焚いて煙を出しても問題のない土地であることを箱根町だけでなく小田原市にも確認してから、まずユニボ免許をとるために専門の講習所に通い、それから中古を購入した。自ら油圧ショベルを操作して窯場をならすため、その機械はいまでも窯の煙突の奥に鎮座する。



火前の作品。程よい灰被りとなっている



中程の棚に詰めた作品。灰が熔けたりそのまま残ったりとさまざま



いちばん奥に詰めた作品。鮮やかな緋色が印象的

窯の窯場を箱根に



焼成を始めて4日目の焼成。「焚き口に薪を積み重ね、燃え尽きるころに炉内に落とすやり方に変えてから、温度の上昇がスムーズになったうえに薪の消費量も少なくなりました」



炎が飛び散らないように囲った煙突